旧家伝える当時の絹文化

竹内家寄贈の着物、帯など紹介

来月16日まで　岡谷蚕糸博物館で企画展

岡谷市の岡谷蚕糸博物館で、明治から昭和期にかけて信州の旧家で受け継がれた絹の着物をテーマにした企画展が開かれている。3代にわたり蚕糸業を営んだ東御市の竹内家から寄贈を受け、帯、小物などを含む60点を紹介。晴れ着から日常着までそろい、当時の絹文化を伝えている。11月16日まで。

（小山眞由美）

明治から昭和期にかけての絹の着物などが並ぶ会場＝岡谷蚕糸博物館

寄贈したのは、曽祖父以来父の代まで蚕の卵を売る蚕種業を営んだ旧家に生まれ、蚕糸とゆかりのある竹内春彦さん(85)。JA長野中央会南信支所長として、養蚕業を発展させた組合製糸である上伊那の「龍水社」、下伊那の「天龍社」の解散にも立ち会った。高齢に伴い、養蚕から製糸、製品化まで一連の流れを見学できる同館に収めたいと、昨年度に親族の着物など約200点を贈った。

展示したのは、七五三の祝い着、家紋が入った扇面文様の振袖、華やかな色彩が目を引く女性の着物など多彩。売り物にならない「くず繭」を使って家族のために制作した「うち織り」、古布を細く裂いて再利用する「裂き織り」など、手仕事による帯やこたつ掛けなども並ぶ。

併せて蚕種業に関するコーナーを設置。仕事で使われた腹掛けや五つ玉のそろばんに加え、蚕種の販売や貸付を記録する帳簿がそろう。

会期中の11月6日は、学芸員によるギャラリートークを行う。

開館は午前9時～午後5時。水曜、祝日の翌日は休館。入場料は一般530円、中高生320円、小学生170円。問い合わせは同館(電話0266・23・3489)へ。